

1. はじめに

映画『フィールド・オブ・ドリームス』をご覧になったであろうか。野球の大ファンである主人公が小さな野球場を造り上げ、昔の大リーガーと野球をするというファンタジー映画であるが、スコットランドの古いリンクスコースでゴルフをしていて似たような感覚になることがある。フェアウェイからどうやってグリーンに寄せるか迷っているとき、300年前の先人プレーヤーもここに佇んで同じことを考えていたと思うと素晴らしいタイムスリップファンタジーを感じずにはいられない。朝夕のコースに人がいなくなった頃、ハリエニシダのブッシュからニッカボッカ姿のゴルファーが出てきそうな感覚を覚える。残念ながら日本のゴルフコースはそこまでの熟成には至っていない。

学生時代はラグビーに夢中だったが、25歳頃からゴルフを始めるようになり、医者としての下積み時代が終わる30歳頃より徐々にゴルフに熱が入り、30代半ばには競技ゴルフにもできるようになっていた。その頃、医者として海外の学会にも出席・発表するようになり、ついでにゴルフ場があれば貸しクラブで回るようになっていた。国内のゴルフ場と異なりコース設計の自由な発想、初対面の外国人との同伴プレーヤーのフレンドリーな雰囲気、全く同じコースがなくそれぞれが土地の個性を反映したコースであること等々に魅了された。大学勤務医時代には、海外での発表があれば大手を振って休暇をとって出張できたので、なんとか海外の学会に演題を出しては演題発表とともに近隣のゴルフコースを回ってくるという不純な習性ができあがってしまい、これが長く大学に留まる原因にもなってしまった。しかし、海外の学会がある大都市は毎年決まっておき、行けるゴルフコースにも制限があった。年齢的にも多少のワガママが許されるようになってきてからは、徐々に学会の枠からはみ出て世界のゴルフ場を求めて行くようになった。65歳の本年(2017年)5月に目標としていた全英オープン開催コース10カ所巡りを完遂した。ゴルフの友人によると、これはかなり希有な経験のようであるので、今回、ここに至る経緯とともに全英オープンが開催される海沿いの自然の地形を生かしたリンクスコースの魅力をお伝えし、今後、同じような道を目指す方に少しでも参考になればと筆を執った次第である。



写真1：ハリエニシダ(Gorse)のブッシュ

表1：『WORLD GOLF RESORTS』の22コース

	コース	プレー日
1	Pebble Beach/ CA	1999.12.14
2	Mauna Lani Resort /Hawaii	2000.03.10
3	Hyatt Regency Sanctuary Cove / AU	2004.01.04
4	Sheraton Mirage Port Douglas/AUS	2002.01.02
5	Golf University/ CA,	2000.02.14
6	Banff Springs/CANADA	2002.08.05
7	Keystone Resorts/ Colorado. USA	2004.08.16
8	Fairmont Resort/ Leura AUS	2005.01.02
9	Bali Handara Kosaido / Bali	1990.03.23
10	La Quinta+PGA West/ CA	1998.04.22
11	Stouffer Esmeralda Resort/ Palm prings,CA	2000.02.07
12	Ventana Canyon /Tucson. Arizona	2000.02.09
13	La Costa/ Carlsbad, CA	1992.04.11
14	The Boulders/ Phoenix, Arizona	2000.02.08
15	Pinehurst / North Carolina.USA	2002.10.23
16	Tryall / Jamaica	1992.04.09
17	Sea Pines Plantation/ South Carolina.USA	2002.10.17
18	Penina G&R/ Portugal	1988.05.22
19	Sandy Lane/ St.James. Barbados	2004.10.25
20	Mena House Oberoi / Cairo.Egypt	2005.12.24
21	Royal Club Evian/ Evian-Les-Bains. France	2005.05.02
22	Doral Resort/ Miami, FL	1994.03.07
23	St.Andrews / Scotland	2002.05.01

2. それは1冊の本から始まった

ある時、以前から海外の学会などで顔見知りであった九州のO先生から「矢部クン、この本に出ている世界のコース全部をどっちが早くまわるか競争しよう！」というチャレンジを受けた。この本は平凡社から出版された『WORLD GOLF RESORTS』（監修：戸張 捷、編：秋山寿郎）で、世界有数のゴルフリゾートが、太平洋側で13コース、大西洋側で9コースが美しい写真とともに紹介されている（表1）。この本の優れている点は意欲さえあれば（プラス、時間とお金）プレーできるリゾートコースが中心で、どんなに行きたくとも不可能なオーガスタなどの様な閉鎖的会員制のコースはリストに入っていない。ゲーム方法は単純で実際に行ったコースで絵はがきを購入して相手に郵送するというものである。私のゴルフへの情熱を評価していただいたの挑戦なので受けて立つしかなく、約10年の年月を要してやっとの思いで完遂することができた。ペブルビーチ、パインハーストなど大御所のコースは結構行くチャンスはあるとしても、カリブ海のジャマイカ・トライオールやバルバドスのサンディーレイン、エジプトのMena House Oberoiなどのコースはこの本がなければまず行く機会はないコースであった。あらためて人生において貴重なものは良きライバルと痛感した。丁度、1999年から2000年のミレニアム年にサンフランシスコのUCSFに留学する機会があり米国西海岸のコースは自分の運転で行くことができた。ある時はカリフォルニア州パームスプリングスのStouffer Esmeralda Resortを午前中にプレーした後、アリゾナ州のVentana Canyonまで約700マイルの距離を、時差を超えて一人で運転して移動したことがあったが、我ながらクレイジー（！）と思いつつ運転した思い出がある。

順調に消化していった『WORLD GOLF RESORTS』のリストのなかで、最後の方に残った難関が英国のSt.Andrews Old Courseであった。インターネット上に「セントアンドリュースにティーアップする7つの方法」などというサイトがあるくらいスタートまでの手続きが厄介なコースであり、専門の旅行業者に法外なお金を払って行く友人もいたが、基本的に航空券からゴルフコースまで全て自力で予約して行くのが素人ゴルファーのアマチュアリズムとの縛りを自らに課していた。しかし、通常の予約では何年も先まで満杯ゆえに、私が選択したのはBallotと呼ばれる前日までにキャンセルなどで空いたスタート枠をクジで決めるという方法であった。ギリギリの日程で行動する身の上故に、前泊するエディンバラのホテルコンシェルジェにBallotの結果をきいてもらうことにしておいた。ホテルに到着してチェックインすると同時に「おめでとう」といわれ舞い上がった瞬間はいまだに忘れ得ない思い出である。それでも事前にハンディキャップ証明書（もちろん英文）をファクスしたり、オールドコースホテルを予約したりと実に煩雑であったが、残り一つを何とかやり遂げるには全てに最優先するという気持ちであった。折角、苦勞して予約したティータイムであったが、

実際にスタートすると優秀なキャディー（実力に応じて 4 段階の位がある）のお陰もあってバンカーには 1 回ほどしか入れないで 3 時間半ほどでホールアウトしてしまったが、もう少しゆっくりラウンドを楽しませてくれよ、というのが本音であった。



写真 2 : St.Andrews Old Course のスウィルカンバーンブリッジにて

3、全英オープン開催コース巡りへの道程

『WORLD GOLF RESORTS』の全コースを回り終わり、しばらくは目標を失った喪失感から間の抜けたゴルフライフになってしまっていたが、ゴルフ人生をながく楽しむためのトレーニングの一環としてマラソンを 2009 年頃より開始した。いくら練習場に通ってもなかなか結果が伴わないゴルフとは違って、マラソンは「走った距離は裏切らない」と言われるように走り始めた頃はどんどん練習効果が現れてくるので面白くなり練習日記を毎日記載して真面目に取り組んだ。2009 年 2 月の東京マラソンを皮切りに、2009 年 9 月にはフランスのメドックマラソン、2010 年 4 月にはロンドンマラソンとタイムは遅いものの何とか完走メダルを頂き満悦していた。このロンドンマラソンは世界でも最も人気がある大会で、現在は日本からのエントリーが不可能なほどの状況である。このロンドンマラソンに出場した際にロンドン在住の同じ専門分野の英国人眼科医師に紹介されて行ったのが Royal St. George's Golf Club であった。ここは非常に閉鎖的な会員制の女人禁制のクラブで、クラブハウス内では常にネクタイ着用が義務づけられる。翌日に迫ったフルマラソンのことを心配しながらラウンドした。一緒にラウンドしてくれた Dr. T は 61 歳の眼科医で、ロンドン大学のゴルフ部出身で、ハンディは 2, St. Andrews もメンバーとのこと。彼のゴルフコーチはアイルランドにいて、不調になると 2 日～3 日レッスンに行くという羨ましい限りのゴルフライフを楽しんでいるゴルフエリートであった。



写真 3 : Royal St. George's Golf Club で一緒にラウンドしてくれた Dr. T。当時 61 歳の眼科医で、ロンドン大学のゴルフ部出身。ハンディは 2, St. Andrews もメンバー。

その後は『世界六大マラソン』制覇の方に夢中になり、2010 年 10 月にはシカゴマラソン、2011 年にはベルリンマラソンと NY シティマラソン、そして 2013 年 4 月 15 日には最も権威あるボストンマラソンに出走して、例の爆発事件があったものなんとか完走メダルを頂くことができた。再び目標を失った虚脱感に苛まれていた頃、全英オープン開催コース 10 カ所リスト (表 2) を見ていて、最も予約の取りにくい、行きにくいコースは St. Andrews Old Course、Royal St. George's Golf Club、Muirfield の三カ所であり、その内の二カ所は既に回っていることに気づいた。であれば人生の思い出に全 10 コースを制覇しようではないかと思い立った。

表 2 : 全英オープン開催コース

	コース	プレー年
1	St. Andrews Old Course	2002 年
2	Royal St. George's Golf Club	2010 年
3	Prestwick Old Course	2015 年
4	Royal Troon GC	〃
5	Royal Liverpool GC	2016 年
6	Royal Birkdale GC	〃
7	Royal Lytham & St Annes GC	〃
8	Trump Turnberry Ailsa Course	2017 年
9	Muirfield	〃
10	Carnoustie Champion Course	〃
11	Royal Portrush Dunluce Links (2019 年開催予定)	2018 年 (?)

4. 全英オープン開催コース 10 カ所巡り

2015 年 10 月、愛するジャパンラグビーがワールドカップ・イングランド大会に出場するのに合わせて渡英してラグビー観戦とゴルフを堪能するという贅沢を味わった。



写真 4： ラグビーワールドカップロンドン大会、ジャパン対サモア戦会場にて。

ロンドン周辺でジャパン対サモア戦など数試合を観戦してから空路スコットランドへ飛び、まず Prestwick でプレーした。1860 年 10 月 17 日、ここで第一回全英オープンが行われた発祥の地である。最初の頃は全英オープンも観客が少なかったこともあり、ここ St. Andrews Old Course の 2 会場でしばらく開催されていた。決して長いコースではないが、意図的な巨大な壁があったり、線路に沿って打っていくホールがあったりと歴史が染みこんだような趣であった。古いコースには必ず駅がある。これはまだ車がない時代にオープンした証拠でもある。激戦を終えたライバルたちが同じ車両で帰路についたであろう光景を想像すると面白い。その後、フェリーでアラン島に渡り Shiskine Golf & Tennis Club でプレーした。ここは巨大なテーブルマウンテンがあるユニークなコースで以前から気になっていたところであった。感心したのは一周が 2 時間程度で回れる小さな島にゴルフコースが 7 つもあるということで、イギリス人のゴルフ好きには呆れるばかりであった。

次に Royal Troon GC でプレーしたが Prestwick から車で 20 分ほどの場所にある。最近では 2016 年の全英オープンが開催された。8 番ホールは「ポステージ・スタンプ」と呼ばれる難攻不落のパー 3 コースであるが、幸運にも 9 番アイアンでのせてパーを拾うことができた。キャディーの「右半分はないものと思え」のアドバイスが良かった。印象的だったのはプレー中に上空を真っ赤なヘリコプターが飛んでいったが、キャディーが教えてくれたところに寄ると、トランプ氏が改造中のターンベリーを個人ヘリで視察に行くところであった。大統領になる 1 年前頃のことである。

2016 年 4 月にはロンドン・ヒースロー空港から海岸づたいにウェールズのリンクスを何カ所かまわりリバプールへ向かい、お目当ての全英開催の Royal Liverpool GC、Royal Birkdale GC、Royal Lytham & St Annes GC を目指した。

最初にプレーしたのは **Royal Porthcawl Golf Club** で、ここは今年の全英シニアオープン開催予定である。ここから海岸に沿って、**Pennard GC**, **Tenby GC**, **Aberdoverly GC** などのコースでプレーしながら移動した。**Aberdoverly GC** は日本でも有名なイアン・ウーズナムのホームコースでもある。現地で感じたのは、ウェールズはイングランドとは全く別の文化圏で道路標記も英語とウェールズ語の併記で、人間もやや小柄でずんぐりした体躯の方が多い。歴史的には 1284 年にイングランドがウェールズを併合したが、それに 10 年の歳月を要したほど苦労したのは複雑な地形とともに頑固な気風によるといわれている。今もイングランド皇太子 (**Prince of Wales** の称号) は歴代、ウェールズのカナーヴォン城で戴冠式をする。1969 年にはチャールズ皇太子の戴冠式が行われた。他方、スコットランドの **Holyrood Abbey** では毎夏やってくるエリザベス女王に一旦、エディンバラ市長が市の鍵を返却する儀式が行われる。それほどにイングランドは **United Kingdom** 維持に配慮しているのが興味深い。「イギリスの歴史がわかると世界の歴史がわかる」とも言われるが、ゴルフの縁でイギリスへたびたび足を運ぶことになり少しばかりイギリスの歴史を勉強すると宗教、文化、人種のせめぎ合いが面白い。イギリスの様な小さい国が世界の富を収奪して世界制覇したのは奇跡的とも思われる。私見ではあるがイギリスにとってゴルフは世界制覇のための一つのツールであったのではとも考える。確かにこのスポーツの面白さは麻薬的でもある。

約 1 週間、ウェールズを旅した後にやっとリバプールに入り、最初に **Royal Liverpool GC** でプレーするが、ここのクラブハウスは写真のごとく実に趣があり圧倒されるものがある。



写真 5 : **Royal Liverpool GC** のクラブハウス

コースはやや箱庭的で丁寧に整備されていた。それまでのウェールズの野性的なコースとはかなり趣がことなつた。ここのロッカールームで日本人の **K** 氏に偶然お会いしたが、かれも我々と同じ趣向のリンクスゴルフを楽しまれる方で、外資系に勤めることから英語が堪能で頻繁に海外に出張している。彼もこの後、**Royal Birkdale GC** に行く予定とのこととご一緒することとなった。**Royal Birkdale GC** は今年の全英オープン開催コースであり、**Royal Liverpool GC** より広々した開放感がある。古い名門コースにしては珍しい近代的な白いクラブハウスが印象的である。ここのバンカー内には写真のようにレーキを立てかけるティーがあり非常に合理的と思われた。



写真6：Royal Birkdale GC のバンカー内にあるレーキを立てかけるティー

このゴルフ旅行の最後が Royal Lytham & St Annes GC で、リバプールでもマンチェスター寄りに位置するのでマンチェスター空港から帰路につくのに便利である。日本では一般にロッジと呼ばれる宿泊施設（Dormy House）がありネクタイ・上着を着用してクラブハウスで夕食をとる。



写真7：Royal Lytham & St Annes GC のクラブハウスと Dormy House

ラウンドの翌朝、二日酔いで早く目が覚めたこともあり、また、素晴らしいコースを再度味わいたいとの思いで早朝 6 時頃から一人で前日のラウンドの反省をしながらコースを順に散策した。日本だと何か文句を言われそうであるが、スタッフ従業員は愛想良く挨拶してくれる。感心したのはバンカー整備の方で、毎朝、愛犬を連れて担当のバンカーを整備しているそうである。刷毛の様なブラシで実に丁寧にバンカー表面をならしていたが、バンカー一つにも慈しみをかけるゴルフ愛を感じた。この犬はゴルフ犬で、絶対にグリーンにあがらず、ラフに打ち込んだボールを探し出し、ボールに歯形を付けないように訓練されている。日本に連れて帰りたい衝動にかられた。



写真8：Royal Lytham & St Annes GC のバンカー整備のスタッフとゴルフ犬。刷毛の様なブラシでバンカー表面をならす。

10カ所巡りを締めるゴルフ旅行は今年のGWに行った。全英オープン開催コース10カ所巡りも残り3コースとなったが、難関はエディンバラ近郊にあるMuirfieldであった。前年のRoyal Liverpool GCで知り合ったK氏と東京の居酒屋でリンクスゴルフの反省会をした際に今年のGWにMuirfieldでプレーできることになったとお聞きし、そこに何とか我々2名もリストに入れて欲しいと懇願してプレーできることになった次第である。後で聞いたところ、彼は当初、St. Andrews Old Courseでのプレーを狙っていたが、それが叶わずにMuirfieldに切り替えたそうである。我々の幸運を感じずにはいられなかった。

今回もエディンバラ空港からレンタカーで出発し、まずTrump Turnberryに直行した。以前はウェスティンホテルの所有であったが、トランプ氏の所有となり2年前に全面的に改修して超豪華なホテルゴルフに変身した。ホテル内は至る所シャンデリアがあふれ眩しく、食器のナイフにまで『TRUMP』の文字が刻まれているのにはあきれた。コースもフェアウェイが以前より広くなりアメリカ的になったそうである。AilsaとKintyreの2コースがあるが、前者は沖合に見えるお椀を逆さにしたようなヨーロッパ中から渡り鳥が飛来する無人島の名前で、後者は一度行きたいと思っているMachrihanish Golf Clubがある半島名である。全英オープン開催コースは前者である。



写真9：豪華なTrump Turnberry Hotel。時計にも『Trump Turnberry』の文字。



写真 10 : Trump Turnberry の灯台のある名物ホール。水平線上左に Ailsa 島が見える。

Trump Turnberry の 2 コースを回った後、エディンバラへむかいシェラトンホテルに投宿した。ここは先に述べた St.Andrews Old Course の Ballot の朗報を知った縁起の良いホテルであるが、考えると 15 年も前の話であり時の流れを感じずにはいられなかった。衰えを知らない自らのゴルフへの情熱には呆れるばかりである。ここを拠点に North Berwick GC、Muirfield、Prestonfield GC の 3 コースを訪れた。

North Berwick GC は全英オープン開催コースではないが、1832 年設立と古く、15 番の「Redan」と呼ばれるショートホールは世界で最高のパー3といわれ、設計者は不明であるものの、世界中から設計家が勉強に来て世界各地にコピーホールを造っている。名匠上田治も若い頃に来て、小野 GC にコピーホールを造っている。我々のラウンドした日は強いアゲインストの海風が吹いていたが、幸運にも二人ともパーを拾うことができた。キャディーに「こんなのは初めて見た」とお褒めを頂いた。個人的にはこのコースや、近くの Dunbar GC (1856 年設立) のような 18 ホールが海沿いの行って帰っての単純なレイアウトのリンクスコースが好みである。

翌日に Muirfield に行くが 19 世紀の終わりから、セントアンドリュースとともに世界のゴルフをリードしてきた名門コースであるだけに緊張した。事前にドレスコードなどの書類が郵送されてきて、クラブハウス内は写真撮影禁止、食堂ではネクタイ着用とのことであった。このコースでの全英オープンのコースレコードは青木功が出した 63 とキャディーから教えられた。ここのランチは非常に豪勢でフルコースの食事であった。



写真 11: Muirfield にて。正式名称は The Honourable Company of Edinburgh Golfers で、18 世紀にトムモリス設計でつくられる。コースではキャディー、アメリカからのゲストと和気あいあいのラウンド。

このゴルフ旅の最後はカーヌスティ・ゴルフリンクスで、エディンバラ空港から約 2 時間にある。ここには全英オープンを開催する Champion Course とともに Buddon Links、Burnside Links の 3 コースがある。近くの B&B に投宿してゴルフ漬けの 5 日間をおくった。来年の全英オープンを開催するためにクラブハウスが建設中であった。このコースで最も有名なのが、「カーヌスティの悲劇」と呼ばれる、1999 年の全英オープンでフランスのバンデベルデが最終日最終組で回って、2 位に 3 打差をつけながら 17 番ホール終了時点で Barry Burn と呼ばれる小川に入れてしまいトリプルボギーをたたき、プレーオフで優勝を逃してしまった事件である。自分でプレーしてみても全英オープン開催コースのなかでも最も難しい印象であった。実際、歴代優勝者の優勝スコアもパープレーであり、その難易度がわかる。Champion Course は難しくてキャディーなしでは回れないが、他の 2 コースは何とかセルフで回れたものの手強いコースであった。



写真 12: 「カーヌスティの悲劇」を生んだ Barry Burn。カーヌスティのグリーンを読むには傾斜、芝目のほかに Barry Burn の地下水流を読む必要があるという。

5. リンクスゴルフ旅行のヒント

1) コース旅程:

イギリスに行く場合、普通はヒースロー空港経由のコースを選ぶことが多いが、ヒースロー空港は荷物紛失、荷物損傷（切り裂きジャックがいるとも言われる）、暗くて長いゲート間の移動などからなるべく避けるのが賢明である。最近、私はフィンランド航空などでヘルシンキに一旦降りて、そこからエディンバラやグラスゴーなどへ直接行くようにしている。そちらの方が空港の規模も手ごろでスムーズである。荷物紛失に備えて最初のホテルには 2 泊滞在する予定であれば大抵はその間に届く。旅程はやはり最低 1 週間は欲しい。2 から 3 カ所のメインのコースは予め日本から予約しておき、あとは中堅どころのコースを現地での評判を聞いて決めるのも良い。レストランと同じで高級

店ばかりが続くと疲れるので時々気楽な家庭料理の店も気が休まるのと同様である。Google Map は有力なツールで、これで高拡大にして目的の地域の海岸線をじっくり見ていくと多数のゴルフ場マークが見つけることができる。そこからゴルフ場のホームページを開いて値踏みして決めるのは楽しい方法である。旅行前に書斎で旅行をしている気持ちになる。他によく用いる手法であるが、各コースにあるプロショップのプロ（年配が良い！）に少しばかりのチップを渡して次のコースを電話で予約してもらうのも間違いのない方法である。

2) キャディーへの対応：

これが結構な難問題である。キャディーはゴルフ場とは独立した別の契約で、古いコースではキャディー小屋がクラブハウスとは別にある。まずチップであるが、最近では基本が 45 ポンドで、そこに出来高払いに加算するのが相場である。私の場合は妻のバック（クラブ総数 10 本程度の軽いもの）を担いでもらい、私は自分のバックを自分で担ぎ（トレーニングを兼ねて）、目標方向や残りの距離などのアドバイスをもらう約束にして、最後に 80 ポンド前後を渡すようにしている。最終ホールを終えてクラブハウスに入る前の短時間にさり気なく渡すためにも現金を用意しておくのが肝要。通常、日本のような貴重品預かり庫はない。

3) 服装：

これまで GW に行くことが多かったが、日本の気候感覚で行くと大変に寒い思いをする。特にリンクスは湿気を含んだ冷たい海風が強いので体感温度は常に 10 度以下である。「イギリスは一日に四季がある」と言われるが、何段階かの服装を用意する必要がある。写真 13 のように毛糸の帽子は必須で、これは強風で飛ばされない点でも必須アイテムである。薄手のダウンジャケットも有用で、この下の防寒下着、德利セーターなど薄手のものを重ねて調整する。ズボンは防風兼防寒の厚手のものが絶対に必要で、滅多に汗はかかないので、毎日同じものをはき続けることが多い。靴はある程度の旅程であれば 2 足持参することをお勧めする。交互にはくと常に乾燥した状態で気持ちよくプレーできる。



写真 13：リンクスでは毛糸の帽子、ダウンジャケット、防寒ズボンが必須アイテム。

4) 食事：

イギリスは不味いとよく言われたが、最近はかなり向上している。あのフィッシュアンドチップスも昔に比べると油の質が良くなったためか美味である。海岸に沿って点在するリンクスコースがあるような小さな町は、当然ながら海に近いので必ず美味しいシーフードレストランがある。ムール貝も日本のものよりプリプリしていて白ワインに良く合う。また、どんな小さな町にでもあるのが中華料理店とインド料理店で、ご飯を食べることができるので助かる。

5) クラブセット：

最近では航空会社の重量制限が厳しくなってきたのでゴルフクラブも減量を計るのが賢明である。アイアンを偶数か奇数にして、軽量バックにするだけでキャディーも喜ぶ。ボールも意外と重いので持参するのは最低限にして、あとは現地調達にする。普段、日本ではフルセットでも実際には得意クラブと不得手クラブがあり満遍なく使っているわけではないことが多いが、この機会に敢えて得意クラブを抜いて、不得手クラブを選んで現地で使いこなすのも良い練習法である。結果的にフルセットの場合とスコアはさほど変わらないものである。

6) レンタカー：

空港についてクラブやスーツケースをレンタカーに積み込むとホッとする。スポーツワゴンタイプがゴルフに適していると思われる。最近ではレンタカーを貸し出す際に、グレートアップを持ちかけてきて思わぬ高額になることが多いので注意。返却の際も、空燃料でかえすと倍料金のガス料金がとられる。レンタカーに付いているナビは日本のもの比して機能劣悪で、交差点を過ぎてから案内を言ったりすることが少なくない。Google Map との併用がお勧めである。イギリスは左側通行で日本と違和感がないが、交差点は環状交差点（ラウンドアバウト）が多いので慣れるまで注意が必要である。

6. 終わりに

1988年から海外ゴルフに行き始め、2002年のSt. Andrews Old Courseから始まった全英オープン開催コース10カ所巡りも終わりか思いきや、最近のニュースで67年ぶりに北アイルランドのロイヤルポータラッシュCCが2年後に全英オープンに復活するとの発表があり、また来年も行かなくてはと旅程を練っている。何百年も前の先人と同じフィールドでボールと戯れることができるスポーツは他になく、フラットなリンクスを歩いているだけで五感が刺激され、精神と肉体のバランスが整ってくるような気分になる。これまで人生のエネルギーの相当の部分をゴルフとマラソンに費やしてきたが、地球という星の一番上質な部分を楽しませてもらったという感謝の気持ちで一杯である。最後に多くのゴルフ友人、今回の大部分のコースに付き合ってくれた妻とお互いの健康に感謝して筆を置く。

7. 参考文献

- 1) WORLD GOLF RESORTS: (監修: 戸張 捷、編: 秋山寿郎) 平凡社、1990年
- 2) PEUGEOT GOLF GUIDE: Mourgue d'Algue 編、
- 3) Golf in Scotland: A Travel-Planning Guide with Profiles of 74 Great Courses: Allan McAllister Ferguson.
- 4) セントアンドリュース物語: 角田満弘。日経 GP 社。2001年
- 5) 定年後、ゴルフに耽る: 山口信吾。ゴルフダイジェスト新書、2008年